

アジア

Vietnam

インターンシップ

2003

引率教授 緒方俊雄教授
Toshio Ogata

緒方ゼミ参加学生

大学院生 林浩平

4年生 有吉健二 安藤佑太

3年生 武藤惣一郎 南浜有希 塩野目朋恵 早川周治 川口祥史

水上直人 小川将洋 三村庸平 岡本真由子 中村祥子

久保朋子 野崎祐介 杉山直樹 土田薫

編集 久保朋子(3年生)

緒方ゼミでは、経済開発と環境保全を研究し、社会的共通資本の経済学という視点から途上国の持続可能な開発の具体的なあり方を探る現地研修として、2003年9月10日から20日にかけて、ベトナムでの「アジア・インターンシップ」を実施した。ノイバイ(ハノイ)空港に夜10時すぎの到着だが、中大の緒方教授指導の下で博士論文を完成させたハノイ国民経済大学のトゥイ先生が出迎えてくださった。そのまま市内の大衆食堂へ行きベトナム名物「フォー」という麺料理に舌鼓をうった。

キャノンベトナム工場見学

「アジア・インターンシップ」の企業訪問は、キャノンベトナムからスタートした。キャノンベトナム工場は、ハノイ市内から車で30分ほどのタンロン工業団地に居を構えていた。

現地の景山社長と日本人職員の笠松さんからお話を伺った。設立は2



001年4月、現在従業員数は、千人を上回る。概ね18歳から25歳までの若い労働者が占めている。ベトナム人は器用で優秀。キャノン内のはんだごて競技会では男女両部門とも優勝はキャノンベトナムの従業員だそう。社員教育を徹底する方針を取り、朝の9時作業開始、夕方5時終業の時間規則は徹底させている。最初は5時前に帰宅準備を始める従業員に終業ベルまで働くよう指導す

るなど、一つ一つを徹底するまでには時間を要したそうだ。

次に、主に海外輸出向けプリンター製造工場を見学させていただいた。「人と機械の共生」を目指す工場では、「高スピード・正確・環境」に配慮した最新技術と熟練労働の調和が図られ、「セル生産」という独自の生産スタイルがとられている。

工場では、従業員のアイデアによる竹製の棚や運搬用具も随所に見られ、環境へ配慮した工場作りや社会貢献活動に心がけている。

ホンダ・ベトナム工場見学

次にハノイ郊外のホンダ・ベトナム工場を訪問し、現地担当者の藤崎マネージャーからお話を伺った。この工場は1996年3月に設立。ベトナム政府の北部経済開発という指導に沿って、ハノイに工場を構えた。

人口約8000万人のベトナムの年間交通死者数は約1万4千人と日本の約2倍にのぼる。ハノイ市内

のバイクの交通量はすさまじく、クラクションが鳴り止むことはない。

ホンダ・ベトナムの日本人スタッフは18名。オフィス内は男性が6割。「ホンダの理念」を教えることを社員教育のモットーとしている。会社のポリシーは、課長も従業員もすべてベトナム人社員で運営することが理想であり、ベトナム人がベトナム人にバイクを販売することを究極の目標としている。

ベトナムでは、ホンダはバイクを指しており、そのうち7割を占めるのがホンダバイクだ。しかしSANDAAやHENDAAのような粗悪なコピー商品も横行したが、政府のバイク登録徹底などにより、安価なコピー商品より段の張るホンモノのバイクを購入する消費者が増え、現在ではコピーメーカーの方がダメージを受けているそうだ。

二輪車製造工場を見学したとき、従業員の給料は一ヶ月約一万円と聞き、日本との賃金格差に驚かされた。

日本工営訪問

日本工営は、ハノイとホーチミンを拠点にコンサルタントを手がける企業で、中大出身の現地スタッフ稲垣先輩からベトナムの道路建設の資金調達についてお話を伺った。あくまでも自分たちの国は自分たちで発展させる、そうした人材育成が重要だと、現地でベトナム要人と交渉している人ならではの貴重な助言を頂いた。

ハノイ国民経済大学（NEU）

と合同ゼミ開催

NEUの学生達およそ200名が白いアオザイとワイシャツの正装で迎える教室に入ると、一斉に拍手が沸き起こった。

合同ゼミでは、中央大学側が交通班、廃棄物班、CDM班、ベトナム側は、交通班、廃棄物班、エネルギー班に分かれ、それぞれ3班の英語論文を事前に作成し、それらを交互に

発表した。パワーポイントを活用し、映像を紹介しながら発表する間に質疑応答が行われ、日越両国の経済的状態の違いや学生の問題意識の違いとともに、冷や汗を流しながら英語で応える貴重な体験をした。予定外の質問には、トウイ先生にベトナム語で通訳していただく一幕もあった。予定時刻を大幅にすぎたゼミ交流は、日本では味わえない非常に有意義なものであった。

ゼミ報告会後の懇親会では、全員が緊張から開放され、ビールを飲み



交わしながら、英語、日本語、ベトナム語で相互理解を深めた。途中、中大生の出し物として、合気道の流儀、剣道の模範演技、書道の実演を披露すると、どれも拍手喝采の盛況で、NEU学生の挑戦者も現れた。ベトナム側の出し物として国歌、校歌など息のあった絶妙の合唱が披露された。その後、相互に歌合戦となり、懇親会会場は夜遅くまで賑わった。

ナムソン廃棄物処理施設視察

前日の廃棄物の議論の現場を視察するために、NEUの学生も参加して、ハノイ市郊外の廃棄物処理施設を訪問した。

「Stinky (臭い)」

現地に着くとすぐゴミの悪臭で鼻を突かれた。処理施設の副社長に現状を伺った。ハノイには、4つの廃棄物処理施設があり、この処理場は広さ83ha、耐久年数は20年、一日回収車で250台、1700トンのゴミが運ばれてくる。埋め立て後は

木を植える予定だそうだ。

気になるゴミ処理方法は、単純な埋め立て方法と汚水溜めへの化学薬品処理方法で、焼却は行っていない。現地の16歳以上の人なら処分場内にも誰でも入れるというので、内部の見学を依頼したが、予約なしの外国人は外部から眺めることしか許されなかった。何だか少しクサイ。

ホイアン・ダナン視察

ホイアンは、東南アジアの中継貿易の拠点として栄えた港町で、16から17世紀にかけて日本人街があった。現在は観光地として栄え、日越友好30周年記念行事で賑わう世界遺産の街並みや「日本橋」を見学し、朱印船貿易時代の日本人の墓にお線香を手向けた。

翌日、近くのダナンのリエンチュウ工業団地を視察した。南シナ海を眺めながら昼食を取り、それから目指すフエまで約110キロのバスの旅。途中、最も標高の高いハイ

バン峠は、ベトナム語で「雲」や「海」という意味の通り、峠の茶屋から望む海や山、北と南の景観は戦略的にも幾度となく利用されてきた。峠の頂きには、戦争時の見張り台もいまだに異様な雰囲気を残っていた。平和を取り戻した現在、この峠の下に日本の援助でトンネルを掘り、中部

経済の発展に寄与していると聞いた。ダナンから4時間、ちょうど日も傾いたところにフエに到着した。フエ農林大学教授で、日本に留学経験のあるロン先生とラン先生ご夫妻が私たちをホテルで出迎えてくださった。

フエ郊外の枯葉剤被害地慰問

フエは古都として世界遺産に指定されている。王宮など建築物は歴史を語り継ぎ、戦争の傷跡が人類の愚かさを教えてくれる。

郊外へ車で1時間も行った山間部では、はげ山が目につく。ベトナム戦争から30年以上経った現在でも自然が回復せず、枯葉剤の傷跡が残る。

緒方研究室「アジア地球環境プロジェクト」とフエ農林大学のフィードバックの現場であるホンハ村とフエン・グエン村の人民委員会を訪れた。この日は雲ひとつない晴天で、遠くの山が見渡せた。何も知らなければ平和そのものに見える山や村である。人民委員会の建物で、主席(村長)にお話を伺った。

ホンハ村の面積は、1万4千ha



あり、そのうち490haが耕作面積である。村の人口は1281人、246世帯、5つの少数民族が暮らしている。うち半分の120世帯が貧困世帯である。

日本の援助に疑問

さらに意外な事実を知らされた。最近、日本からの援助で森林再生計画が発表され、植林予定地を提供したが、実際の植林が専門会社に委託され、植林用地に現地農民が排除されてしまった。そのために日本の援助は現地の農民を貧困に陥れていると非難された。日本人としてこの村を訪問したのは、昨年の緒方教授が初めてだから、現地を無視した日本の対外援助の問題点をはっきりと認識した。

また、この村で枯葉剤の被害者が公式に認定されたのは1964年、現在の被害者は483人だが、経済的理由で政府からの援助を認定された人は、35人とどまる。

ゼミ生たちは、千羽鶴、米とお菓子などのお土産を被害者の方に手渡し、歌を披露して励ました。被害者の方々と握手した時、彼らの手が小刻みに震えており、また差し出した手がこれ以上伸ばせないなど被害者の苦しみに触れた。枯葉剤の被害や貧困の悪循環を訴えることの出来ない弱い立場の村人たちに、援助の手を差し伸べるフエ農林大学との共同研究の意義と必要性を知ることが出来た。

フエ農林大学と合同植林

フエ農林大学のクアン副学長と緒方教授のベトナム語の挨拶が歓迎セレモニーにおいて行われ、いよいよ植林だ。

フエ農林大学から植林予定地500haの利用権を提供していただき、植林用地の整備と3種類の苗などの森林投資資金を緒方教授が提供して準備が始まり、フエの学生と合同で1500本の苗を植林した。樹木が

生長すると森林資源として活用できるので、それをフエ農林大学との共同の研究教育基金にする。戦争の傷跡に緑が戻り、森林の活用による農村開発が実を結ぶまでは、まだ数年の歳月が必要である。

また、「アジア地球環境プロジェクト」が『京都議定書』のCDM(クリーン開発メカニズム)として認められ、「排出権」ビジネスとしても発

展するようにと、緒方教授の構想は広がっている。

ベトナムを後に

ベトナムの学友と再会を誓い離別の挨拶を済ませた後、帰国の途にいった。飛行機の窓から緑の生態系、美しいフエやハノイの街並みを一望することができた。10年後この国はどう変貌しているのだろうか。失われた熱帯雨林が戻り生物種多様性が保全され、街角から大気汚染のためのマスクが外され、交通安全がはかれる。経済が発展し、街路樹と南洋家屋が立ち並び……私の想像は膨らむ。ベトナムの経済は、ベトナム人の内生的発展力に依存している。日本がベトナムの持続可能な開発に対して貢献する余地も多分にある。かつて中国中部で別れ別れになった「倭族」の兄弟姉妹が、いまようやく再会し、お互いが力を合わせる時がきた。機内で眠りにつくとき、ホンハ村の子供たちの笑顔が浮かんだ。

